

平成29年度第2回総合教育会議 会議録

日 時 平成28年11月6日（水）午後1時30分から午後4時まで
場 所 加悦保健センター 農事相談室
出席者 山添町長、大迫参与
岡田教育委員長、樋口委員、酒井委員、佐々木委員、塩見教育長
安田総務課主幹
坪倉教育次長、山本学校教育課長、森垣総括指導主事、柴田学校教育課主幹

（坪倉教育次長）

それでは時間になりましたので、ただ今から平成29年度第2回教育総合会議を開会させていただきます。

はじめに、山添町長よりご挨拶を申し上げます。

（山添町長）

皆さんこんにちは。本日は、平成29年度第2回の総合教育会議を開催させていただきましたところ、皆様方にはお忙しい中、ご出席をいただきましてありがとうございます。

本年度においては、大迫先生を参与にお迎えし、2020年度に実施される学習指導要領の改訂のプロセスをいかに本町として生み出すべきかについてご尽力をいただいています。

大迫先生には、これまで各種関係団体との懇談や学校訪問を積極的に実施していただき、先生からの視点において、さまざまなご提言やこれからの方向性について発言をいただけるものと確信をいたしております。

本日の総合教育会議におきましては、次第のとおり大きく2つの議題を設けているので、積極的な意見交換が行いたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

以上たいへんたいへん簡単ではありますが、本日の会議に先立ってのご挨拶に代えさせていただきますと思います。

それでは、本日はどうぞよろしく願い申し上げます。

（坪倉教育次長）

ありがとうございます。

それでは、早速議題に入らせていただきたいと思います。

ただいま、町長の挨拶にもありましたように、大迫先生には8月28日においては、教育委員の皆さんとの懇談、議会の総務文教厚生常任委員会との懇談、またその後には、

本町の小学校の実際の現場を見ていただくということで、たいへんお世話になりました。

その中から大迫先生がいろいろと感じられたこと、アドバイスなどをお話しさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(大迫参与)

こんにちは。

ただいま、ご紹介いただいたように、8月の各種団体との懇談及び9月の小学校の授業を見せていただいた中で、参与としての町長からミッションとしていただいています。与謝野町の教育の進め方について、今日、提言的なものをお示しできればと思います。

もう一度年度末近くに、いわゆる総括的な形でお会いできればと思っておりまして、本日において話をされたことを、その間に皆さんでいろいろと揉んでいただければいいかなというところを基本の立場としてお話しをさせていただきます。

具体的話に入る前に 私は、数値化となる特異な共通性を文科省に全面的な協力をするという形の中で日本の教育機関或いは自治体に対して、補完する形で様々な活動を行っています。

国際バカロレアが私の関わりの中のキーワードとなりますが、東京都の都立高校で東京都立国際高校という学校がありまして、国が進めている国際バカロレアの講座の導入の先進校的な取組みをすでに始めており、その取組みも3年目を迎えています。その導入のための委員会が組織され、私は、その導入の委員を務めました。

その時の印象がすごくあり、東京都は、ほぼ国に準ずるような組織であり、いろんな意味で大変時間がかかりました。

また、大阪市が公設民営という形で、大阪市立の校舎を使用したうえで、民間業者が学校運営をするもので、公設民営というプロセスは、何年か前から出ていますが、実施に踏み切ったのは初めてのケースとなり、大阪市としても、初めてのケースで多くの方が注目するだろうと思います。

中高6年間の一貫教育で、民間はYMCAという団体が採択されました。それについても、公設民営委員会の委員を務めています。2月25日の日曜日に、その公設民営学校の第一回説明会が一般市民を対象に行われます。そこで、教育内容についての基本的な方針についてプレゼンテーションをすることになっていますので、お時間があればご参加ください。

このような仕事に関わっていると大阪市は、東京都より、やり易いのかなと感じています。いろんな意味でスピード感があつたし、初めての試みということに関して、前例が無いので、大変ではありましたが、思ったよりは結構進むという感じでした。

何を申し上げたいかということが分かったと思うのですが、町長さんから参与の話をしていただき、与謝野町の教育の考え方について、何らかのアドバイスが必要という時に、東京都、大阪市、与謝野町という「サイズ」がすごく重要だと思っています。何かの改

革をするという。子どもたちの数がすごく少ないかも知れないが、そういうことではなしに、何か新しいことを、何か改革と呼ばれるようなことをするときには、ある程度すぐいろんなことが思い切って出来る「サイズ」が非常に影響の強いことだという様に、この5～6年、いろんな教育改革の仕事に直接的に関わる中で実感しています。

ですから、そういう意味で、お話を受けた時に、「なんか出来るかもしれない。」というのか「一寸だけでも何か変化が起こせるかも知れない」とすごく強く思いました。

私が参与という立場で関わらせていただく、一番根柢の所では、そういう思いがあったということをお伝えしていました。

東京都、大阪市の仕事もそれぞれ意味があり、形にもなったので、肯定的にはとらえてはいるのですが、ちょっと違う眺めだと、ここでしか出来ないというポイントが意外と小さくないのだと、最初にメッセージとしてお話ししたいと思います。

イントロが長くなりましたが、本題に入ります。

皆さんの頭の中に刻み込まれている方も多いと思うのですが、「主体的で、対話的で深い学び」これは何かと言いますと、2020年からの日本の学習指導要領のキーワードになります。私は保護者の皆さんに話す機会が少ない訳ですが、皆さんのお子さんがこれから小中高と進学していく中では、このカリキュラムが大事ですよと伝えています。

ご承知のように学習指導要領は10年に1回改訂が行われ、2010年が「各個人個別ランゲージ」20年前の学習要領のキーワードは、「ゆとり」次の10年後の学習指導要領のキーワードは「脱ゆとり教育」、今回は「ゆとり」とか「脱ゆとり」を踏まえて、学びの形をしっかりと行うということで、「主体的で、対話的で深い学び」となりました。

これから準備をしていかなければならないこの国の新しい教育の形は、これをいかにそれぞれの教育現場で実現、形にしていくかということになります。

ということは、100%そうでは無かったということでは無いのですが、今までの形は、十分に主体的ではなかった。反対言葉としてはおかしいのですが、いわゆる受動的だったということです。

それを自ら進んで学んでいく、「主体的な学び」にしていこうと、「対話的」というのは、「行動型」という言い方をすることもあります。共に学んでいくということで、基本的には一人一人が個別に個々の学力を育てていく、或いは成長を遂げていくという形で、これも反対言葉としては、あまり正確ではないのですが、あえて言うと、対話的の反対は、「個別競争的」な教育ということになるのかも知れません。

「深い学び」とは何かというと、「深い学び」の反対は、「浅い学び」になりますが、「浅い学び」とは何かというと、試験のための学び「知識を得て、それを覚えて、覚えたことを試験で書いて」その時だけという学びが中心です。事実暗記型教育というのが中心でした。

それはそれで、学びの基本部分いわゆる基礎学習として絶対に無視できないことですが、それに終始しすぎて、その先が無かったのです。「深い学び」というのは、その先に「概念」を形成したり、試験で役割が終わる学びではないといった方がいいかも知れません。「To Learning for Life (人生にとって有意義な学び)」というところまで学びを深めていこう。というのが、この学習指導要領のキーワードの解説になります。

さらに追加し、これは前回の話し合いの際にも示した表になりますが、左側が今、これまでの教育はこういう形だったというもので、競争的な学び、一方向型授業、受動的授業、知識注入型授業ということで、今使った言葉が書いてあります。それを右側に移していくことが、今回の学習指導要領の大きな方向性であるということになります。

繰り返しになりますが、これまでの教育を全面的に否定する訳ではありません。

それはこの国の教育を崩壊させることになるので、どの程度これからの教育へ何パーセント入れていくことが出来るか？ここは、力の見せ所、かつ先生方、或いは学校、或いは地域教育委員会の力の見せ所というのは、当然どの割合、どのくらいまでそれを入れることが出来るかということが、新学習指導要領に対してどれだけ答えうる、それに呼応できている教育が出来ているかということになると思います。

では、具体的にこれは9月12日に市場小学校の授業を見せていただいて、その日のうちに会議の形でお話しさせていただきましたが、多くの場面で感動いたしました。

すごく良い教育をしているなと感じました。

私は国際バカロレアの専門家として、世界中のIB校、国内の学校でIBを目指している学校をたくさん見ているが、市場小学校のこの授業はすごいなと正直思いました。捨てるのが難しいとか、良くぞここまで指導しておられると思いました。

それは、音楽の授業です。これはすごいなと思いました。

前の表の「これまでの教育」と「これからの教育」の割合がこれからすごく大事だと思えます。

これまでの教育というのは「文化」、「歴史」、「伝統」に根差した教育、「ナショナルカリキュラム」という言い方をしますが、それぞれの国が持っている「カリキュラム」例えばイギリスだったら「イギリスのカリキュラム」というのがあります。

我々の国の「ナショナルカリキュラム」は「学習指導要領」と呼ばれるものです。

それぞれの国の「ナショナルカリキュラム」はそれぞれの国の「歴史」、「文化」、「伝統」に根差していますので、たとえば、イギリスの「ナショナルカリキュラム」と比べると当たり前ですが、日本のカリキュラムは違います。

同じ小学生なのに、なぜ違うかということ、それぞれの国の「文化」、「歴史」、「伝統」に根差して「ナショナルカリキュラム」が作り上げられていますので、違って当たり前です。根差している「文化」「歴史」「伝統」とさらに細かく言うと国の「文化」「歴史」「伝統」であり、地域の「文化」「歴史」「伝統」であり、学校の「文化」「歴史」「伝統」であることを、9月12日には感じました。それは活かしていかなければならない。そ

れを喪失するというのは、アイデンティティの喪失に近づいてしまう。そういうことを非常に深く9月12日には考えて、重要なのは一帯に失ってはいけない「文化」「歴史」「伝統」に根差した教育をどう行うか厳格化しておかなければいけない。「何となく大事だね」とか「失ってはいけないよね」というよりも一歩先に行って、きちっとずっと継続させていかなければならないものは何かということ「言語化」していくこと大事ではないかと思います。このあたり曖昧な形で、大事だという認識がぼんやりと共有されているが、これを「具現化」しておくことが必要だと思う。それからそれを活かしていく教育というものは、どういった形で組み立てていかなければならないか理論化する必要がないでしょうか。でないと、新しいものを入れた場合に、そこがぶれてしまうような気がします。或いは、新しいことが入れられない状態になるかもしれない。活かしていかなければならないものに対して、再度「言語化」して「理論化」して、最近の流行の言葉で「見える化」をしておかなければならないのではないのでしょうか。そうでないと、新しいことが入らなくなるかもしれない。それが、強く思ったことです。

キリローバ・ナージャというロシアの女性の資料をご覧ください。

ナージャさんは6つの国の教育を受けた方で、資料で4つの国の体育の時間の整列について紹介しています。

資料1 ページの下の段落の「日本の小学校に転校したとき」というところから次のページの三段落目にかけては、日本のことが書いてあります。

我々もよく知っている様に、背の小さい子どもから順に並びます。

2 ページの四段落目からの「アメリカの小学校ではどうか」というと、整列するという概念など無いということです。

2 ページ目の一番下の段落では、フランスの小学校ですが、整列する概念どころか、体操服も体育館もなかった。とのこと。

最後の段落では、実は非言語的で受験科目ではない体育こそが、いろんな教え方を試すのにピッタリな科目かもしれない。というのが、彼女の意見であるということです。

何を申し上げたいかという、「活かすこと」に書いてある「文化」、「歴史」、「伝統」に根差したことが大事だということをしつかりと「認識」「把握」しなければならないのですが、それは、普遍世界の中で唯一「普遍のもの」ではないという認識が大事であり、「絶対これじゃないといけない」ものではなくて、たとえば先の体育の形態でいえば、世界で様々存在している形態の中の一つに過ぎない。英語で言うと ONE OF THEM その認識も重要で、仮にこれは譲れないという風な、体育の授業はこうでなければいけないというものでもないという ONE OF THEM の考え方が無いと、なかなか柔軟な考え方が出来ないかも知れない。同時に、「失ってはいけない」、「最後まで守らなければならぬかけがえのないもの」であるという Only One だという要素もある。

ONE OF THEM という考え方と、ONLY ONE という考え方をバランスよく考えていくことが、新しいものを教育に入れる時に大事な事だと思い、ナージャさんの文書を持つ

てきました。

さらに、活かすことの中の、「アクティブ・ラーニング」という言葉が学習指導要領から消えました。

基本構想と呼ばれる「今回の学習指導要領の改正はこういう方向で行いますよ」というオープンにされた文書の中には、大きな字が「アクティブ・ラーニング」でうたわれていました。それが最終的には消えて、もしかしたら脚注にそういったものを「アクティブラーニング」と呼ぶ場合もある。といった記載があるかも知れない。

理由は、「アクティブラーニング」ということで飛びついて、何か今までやったことが無い話し合いであるとか、アクティビティとかを形だけやってしまって、奥深くに入っていない場合でもOKとしてしまうことを国としては恐れたということです。「アクティブ・ラーニング」という言葉を安に使うのはやめようということと、もう一つは「アクティブ・ラーニング」という言葉の定義は多用にあります。1990年代の初期にアメリカの大学カリキュラムに使われた言葉なのですが、その後いろいろな初等小中教育の中で使われるようになって、定義がずれてきています。

人によって解釈が違う言葉が、「ナショナルカリキュラム」に載っているということが、どうかということになり、「アクティブラーニング」という言葉が最終的には消えたのですが、形というもの、体育の場合は整列という形に出っていますが、教育改革をするときに、形で入ってしまって、それで「見た目的」には正しいみたいな、そこで満足してはいけなくて、その形で実現されるものは何かというところで、入らなくてはいけないということをお話ししておきたいと思います。

実は活かすことの中で、日本のほとんどの公立小中学校はそうなのですが、先ほどの表にあった形でいうと一方向性型授業ですから、先生の黒板があり、先生の教卓があり、生徒たちが対面の形で並んでいる。この形では、「対話型」の勉強は出来ないということです。それは従来型の一方向性型の授業において有効であると考えられた教室形態であり、それをそのまま変えずに「主体的で対話的な深い学び」というのは出来ない。

グループ型の机に変えて、というのは、日本の伝統的な班学習でずっとやっていますから、目指すことではないのですが、そういう形をとっておけば、新しい学びに踏み出しているかという、実はそうではないのです。そこで何を学ばれているか、内容をちゃんと見ないといけないのです。

活かすことの中でも、日本の伝統的な机の並び方を生かしたらいいのかどうかというところで、変えたら良いという訳でもないことのお話をしました。

新しく試みることに入ります。

今までの活かすことというのは、主体性をしっかりと踏まえた中で何を言う。

どこの地域でも、国のレベルでも、どうしても内側へ、内側へ入っていく傾向があるので、思い切って外へ存在するものに触れてみるのがヒントになるのではないかと、今日新しく試みることにしてお話したことなんですが、私は、「支持政党が

無い」という分類に入るので、立憲民主党の事を言うと、結構いいコピーだと思ったのですが、「右でも左でもない前へ」と上手だなと思いました。

イデオロギーの時代が終わっているのは確かだと思うので、教育ですから右でも左でもないと言うとおかしいかもしれませんが、「右でも左でもない」「前へ」じゃなくて「外へ」ということが言えます。「外」に絶対にヒントがある。なかなか毎日忙しいと中へ中へと入ってしまって、改革のヒントを外へということなのです。

この資料の1から5までが私の専門教育の国際バカロレアなのですが、この5つのスキルを3歳段階から18歳段階まで年齢別に作っていくということなんですね。

Thinkingskills,

Communications skills,

socialskills,

Self-management skills,

Research skills

の5つのスキルを含む内容的にはそういうプログラムです。それを国が2018年までに200校作ろうというプロジェクトを5年前に始めたのですが、なぜかというところ、こういうスキルを育てる教育が、日本の国にはもう少しあった方が良さそう。最高の完成形態がIBであるということを知ってこれを入れたということなのです。

このそれぞれのスキルというのは、細かく見ると、こういうことを指しているんだということが全部出てくるんですが、今日1つだけ、その5つのスキルの内 social skills (社会性スキル) というのをご紹介します。

日本のスタッフが訳しているもので、公式のものとは若干ずれているのですが、

責任を引き受けること (Accepting responsibility)

他の人を大切にすること (Respecting others)

協力すること (Cooperating)

ぶつかり合いを解決すること (Resolving conflict)

集団で意思決定をすること (Group decision-making)

集団内での様々な役割を負うこと (Adopting a variety of group roles)

これを学校教育活動の中で、子どもたちに5つの中で、そのことが含まれるようにしようというのが、IBプログラムの社会性スキルです。

これをみると、たぶん新しいものは無いと思います。あえて言うところの事柄をインターナショナルマインドネスというのですが、国際的視野の中でこのことを考えるようなトレーニングをします。そのために、もちろん身近な集団の中でも学ぶのですが、ゴールが国際教育プログラムですので、国際的視野を持つことの中で、社会性スキルを与え続けられるということで少し違うかもしれませんが、個々に見ると日本がこれまでやってきたことと、皆にとって特段初めて聞いたことではないと思います。しかし、IBの中で日本の教育と根本的に違うことが一つだけあります。それは、「道徳」とかの

個別の時間帯の中で学ばれるのではないということです。すべての教科学習、すべての学校教育の場の中で、すべてがこの社会性スキル、先ほどの5つのスキルがすべて学校教育全体の中で育てられていく。そこが非常に大きく違うところです。たとえばそういう発想で、一つだけでも社会性スキルでなくても良いのですが、学校全体でどの教科でもどの場面でもこれを教科学習の中に入れていく様な意味での教科融合型テーマというものを持って良いというのが、具体的な一つの提案として、お話をさせていただいています。

さらに今から具体的な話をさせていただきますが、3ページの英語教育です。市場小学校の英語教育を見せていただきました。

「カリキュラムが必要ではないか」という気がしました。私は1時間だけ見せていただいたのですが、その時は4人、日本人の先生1人、外国人の先生3人だったでしょうか？その体制で、その1時間だけ見たら、もしかしたら「パッと見た人」にしたら、それは良い小学校の授業に見えたかも知れない。学校訪問者が、それを見たら「すごく進んでいますね」と言われたかもしれない。だけどすごくシビアな言い方すると、私の様にたくさんの事例を見ていると、正直言って内容的にはそんなに良いとは思わない。それは別の問題かもしれないので、もっと他にすごく気になったのは、伝統的な手法があり、世界中どこでもやっている英語の教育なんですが、それをやっていて、いつまでもそれをやっているとすると、正直意味がないです。

サイモンセルフは、導入の時期に1回か2回やるものです。

そういう形で見えていくと、やはりカリキュラムの中で話をしなくてはなりません。

しかもそれは、4技能（Listening, Speaking, Reading, Writing）のそれぞれで、何時間分で、今はその段階のどこをやっている。ていうのが見えないとあの授業が全体の中のどの位置づけなのか全くわからない。

ということで、それが必要、それが有ると、ALTの先生がもしかしたらお国に帰られるかも知れない。だけど、与謝野町の小学校で学校教育は、この中でやっているからというので「ブレ」ない。もしそういうものが無いと、学校の先生方はどうしても異動がありますから、長く異動されない方も例外的にあるのかも知れないが、英語の先生方に一定英語教育を学ばせるとしたら、学校としてのカリキュラム又は町としての英語カリキュラムが無いと非常にやりづらい。その仕事を今おられるALTの先生に行っていたただくことも重要なことではないかと。

CAN-DOとは、どういうことをやって、どういうことが出来るようになったか、これは文科省が中学校英語教育で推奨して、正式にこの形で進むように指示を出しているものなので、その小学校版は、決まっていないのです。ですから独自のものを持ってほしいと思っています。

同じように楽しさは必要、そこも検討して明確にできていないところなのですが、小学校英語教育と中学校英語教育のカリキュラム的な整合性がまだ出来ていないのです。

それゆえに小学校英語教育は、楽しく英語嫌いにならないように、英語になじむということが前面に出ていて、それはそれで良いとは思いますが、やはりある程度段階的に進んでいることに、楽しみながら学んでいくということが無いと、ただ英語嫌いにならないだけ、英語嫌いをなくす、英語嫌いが発生しないように、英語になじむだけだと時間がもったいないと思います。楽しさを否定して、いわゆる文法的なことをずっと本でやりなさいって言っている訳ではありません。

そのあたりもカリキュラムの勉強の中、重要なファクターになると思います。

評価の仕方ですが、冒頭の感想と重なるのですが、インターナショナルスクールの開校の準備をしていて、海外のお子さんをお招きすることが中心となるのですが、日本の方でも興味のある方は受けることもできます。インターナショナルスクールは全部英語で教科学習をやりますので、生活言語の英語じゃ全然使い物にならないです。いわゆる学習言語まで及ばないと学習になりません。

以前に保護者の方が子どもに小さい時からいろいろやらせていて、インターナショナルスクールの教育を受けさせようとされるのですが、実際にお子さんにお会いすると、お子さんの英語のレベルが、インターナショナルスクールの教育を受けるレベルとはかけ離れていて、入校のインタビュー中にお子さんが泣き出してしまいました。

そのようなことは二度と見たくない、つらい時間になったのですが、保護者の方は子どもが出来ると思っているのです。

理由は明確です。お父さんもお母さんも英語が出来ないから、英語を習う子どものレベルの判断がつかないからです。

私どもが、公に説明している学習言語レベルに近づいて無いと、勉強できないですよ。

日本語の小学校で勉強している内容が、英語で行われていて、お子さんがその内容が分かるかどうか？先生とのやり取りが出来るかどうか。それを想像したら、分るはずです。

まったく英語のレベルが届かない子どもたちの共通点というのは、保護者の方がお子さんの英語力を御自身が分かっていなくて、判断ができないから 小学校での教室での英語は、あまり英語が得意でない方々が、これくらいで良いんじゃないか、出来るんじゃないかと思ってしまうと、すごく危険だと思います。

きちっとした、出来るだけネイティブな人にしっかり見てもらって、日本人の方が変に「うまくいってる」とか、言わない方がいいと思います。もし、日本の方でもそのような背景のある方ならいいが、厳しい言い方になるが、決して十分な状態じゃないのに、良い英語の授業が出来ているという誤った判断で、そのまま通じちゃうということになるのが、最近すごく気になっていることです。

次は、教員の方の評価についても同じで、今回与謝野町の先生方とやっていく将来的なこととして聞いていただければと思うのですが、日本の学校公教育の管理職にある先生方が、外国人教諭の採用の時に面接をされて、教員として採用される典型的なパター

ンを言うと、人柄が良い、少しだけ日本語が出来る、子ども思い、日本が好きで、子どもが好き、そうすると、それ以上が踏み込めないで、まあいいかな・・・となる。

しかし、必要なのは教育者としての専門性、それぞれの国の教員免許を持っているか？とか、最低限教育系の勉強をある程度してきたか？別の分野の勉強でも良いのですが、ちゃんとした学士として修業してきたのか？ どうしても、英語で日本人が外国人を面接していると、外国人コンプレックスみたいの中で、判断しているような気がします。教員の評価として、ちゃんとそういうことを踏まえていかないと、本当は子どもたちの教育にふさわしくない人が、この国の弱さに付け込んで、日本の教育現場に入っているということが、正直少くないように思います。

我々の国の教育現場を踏み荒らされてはならない。英語教育に関して私の経験からお話をしました。

授業全般へのアイデアということですが、社会性スキルの中の変化で授業とつないでも良いということを申し上げましたが、これも国際バカロレアのPYPという、3歳から小学校5年生年齢の初等教育プログラムの核となっている探究单元を紹介します。イメージづくりのものです。PYPには、国語とか算数とか理科と社会とか科目の名前は存在しません。時間割表をみると、どこで社会をやっているとか。理科をやっているとかが見えません。なぜかというとな部UOI（探究单元値）の中で、小学校4年生で学ぶべき算数だとか、理科とか社会とか国語が入っている。ですから当該学年の内容というのは、学習を修業しているのですが、この6つのテーマが1月半ずつで6つ、十分なものなのですが、この中に学年の学習内容が入る。1年生はそれで終わり、2年生は同じように6つのテーマを同じように深めていく。3年生は3年生なりに深めていく。という形で小学校の間ずっとこのテーマの中で、どの学年の教科学習も、その中に含みこむ、このプログラムで良いと言われていることを2つ話しておきます。

1つは小学校段階の教科学習というのは、教科同士がつながった方が、それぞれの教科の理解、学びが定着すると言われているし、アメリカの教育学者達は、データで出している。2年生の算数と2年生の理科が1つのテーマでつながりながら勉強したほうが、2年生の算数、2年生の理科自体の学びをちゃんと出来る。これはたぶん小学校だけの現象ではないかと私は思いますが、中学校からは個別に部分的につながったらより深い学びが個別的に既成するかもしれないので、中高に関してはIBも教科ごとの学習で、教科の先生方が日本の学校のように入りますので、この教科をつなぐことによって各教科の学びがより深くなるということは、初等教育レベルだけで発生することかもしれない。

もう一つはテーマです。

Who we are 私たちは何なのか 或いは Sharing the planet

簡単に造られたテーマではなくて、子どもたちが21世紀の中で重要と考えられている

テーマを設置しています。たとえば、Sharing the planet というテーマを小学校1年生からずっと学んでいる。そして大人になったとき、小学校から学んでいる Sharing the planet というテーマに対してのアプローチ方法が分かりながら、それぞれの社会人での生活を生き抜いていくというような形で、簡単に造られたテーマではなく子どもたちが生きていく時代の中で世界的に重要で共有されていくだろう。そのことを考えて、より良い世界になるための貢献の糸口がつかめるかも知れないというようなことを小さい時からテーマとして向き合わせている。簡単に設定したテーマではなく、21世紀的テーマというのを小さい年齢から向き合わせてあげている。というのが、テーマ設定としてすごく重要です。

この2つが教科の違いで勉強した時の特徴で、何かやるとしたら、冒頭で申し上げたように全体でなくてもいいんですが、何か一つだけでもそういった部分で1小学校、1中学校だけではなくて、町全体の中学校が1つのテーマでつながっていれば可能ではないかとイメージとして持っています。

最後に授業全般へのアイデアで、「問う」というキーワードを用意してきました。

「主体的で、対話的な深い学び」の特に「深い学び」のところで関係するのが、先生の役割ということで、先生の役割が、Teacher から Facilitator になるということがキーワードになっています。Facilitator というのは促す人、Teacher は教える人です。

どうするかというと、本質的な問い (Essential Question) が授業の中で増える。知識をずっと伝達・注入していくのではなく、あるところで、ここだということ、この問題について考えていこうという形で、深い学びにこの形を導いてく、日本全体で授業中になるべく児童生徒に問いを出そうという方向が少しずつ増えてきている。一方的に「何年にこういう事件が起こったから覚えなさい」という授業からこの事件について考えてみようという問いを出すことがこれから大事なのだということが増えている。

いろんな学校を見ている中で、先生方が一方的に延々と講義型で、網羅主義型で知識を出しているだけではなく、それだけではなく、厳密にいうと、それは本質的な問いというか、ここから深い学びになるのかというものよりも、授業の流れを作るための問い、流れを作っているだけで、無いよりはましかも知れないが、子どもたちがこのテーマについて探究して、学んでいこうというところまでは、なかなか導くことはできない。深い学びに導くための促すための本質的な教育を問えるようなトレーニングをしていかなくてはならない。

ただ、一方的な知識注入からここへ転換していくことは決してマイナスではないと思います。

例えば生徒の声の割合です。

単純に45分の授業の中で、どれだけ先生が説明して、どれだけ子どもたちが発言しているのか。たぶん伝統的なもので、先生がずっとしゃべりっぱなしという形で、特に言語系英語の学習、高校の英語教育は現在の学習指導要領から基本的に英語でやるこ

とになっています。もっとも進んでいると思われる東京都でさえ、生徒が英語がしゃべる時間は、半分以下となっています。

子どもたちの英語の音が聞こえないと、子どもたちの英語は上手にならないと思います。

ここの主体的な学び、受動的ではないことの突破口として、生徒の声の割合が一つのヒントになると思います。

最後は、高校の教員への提言的なものであるのですが、小学校では難しいかもしれませんが、実は深い学びというのは、アメリカの大学のイメージをもたれるのがわかり易いかもしれません。アメリカの大学というのは、授業に出る前に、すごい量の本を読むように言われるんです。日本の留学生は泣きながら授業に臨むことが少なくないのですが、授業はその本を読んできた前提で、「どう考えたか」、「何が問題だと思うか」というところで、本質的な学びに入ることになります。

読んでこない学生は、知識の泥棒と呼ばれ、人の考えてきたことだけを聞くだけとなります。

授業は予習があって、学びを深めるもの。小学生の場合は難しいかも知れないが、ポイントとして、ファシリティという、授業中にやる気を出させたみたいなおイメージが浮かぶと思うんですが、ファシリテーターとしてもっと重要な役目は、授業に入る前に興味を持っている状態を作っておく。

先ほどの大学生の例をあげると、大学生たちが進んで次の時間までに、本を読んで来ようと思える形を作っておく。

自画自賛ですが、私の大学では、国際教養学科の学生を面倒見ている、55名の学生が国際バカロレアの教員を目指している。彼らは、途中から事前にすごく勉強して持ち込んでくれるようになった。すごく学校に籠るようになった。面白くなって、事前に良い準備して、授業に参加したいという気持ちになった。

彼らは、数年後には国際バカロレア又は国際バカロレア的な現場を担っていると思うととてもうれしいが、彼らは今までの教育を受けて真面目にやってきた学生であると思いますが、これまでの学習も間違っていないと思うのです。

授業に向かって楽しむために、準備しておこうと思うために、ファシリテーターの大きな役目。教室でファシリテートするだけではない。うまいディスカッションとかうまいチームの共同型学習とかアクティビティーだけをやらせるのが、ファシリテーターではない。

そこがうまくいくと教室が良い教室になる

最後に、どこまで形になるかわからないが、今まで与謝野町になかったことを取り入れて、新しい事、よそでやってない事をやってみようという風に決断されることがあるのなら、その教育改革と同時に働き方改革もやらないと、絶対にどこかで壁にぶち当たります。教育改革と働き方改革を必ずつなげながらやっていく。共に少しだけ

で良いと思いますが、劇的な教育改革も難しいし、劇的な働き方改革も難しいと思うが、ゼロだと厳しいと思います。そこが変わった。と働き方改革に対してもアプローチしているから教育改革にも向き合ったとするというか情熱がでるみたいな形が現場の先生にとってはすごく重要になってくるような気がします。

(坪倉教育次長)

先生ありがとうございました。

そうしましたら、ここからは先生へのご質問も含めまして、2番目の与謝野町の教育の在り方について、自由に意見交換ということにさせていただきたいと思います。

どうぞよろしくお願ひします。

ご発言はどなたからでも結構です。

(森垣総括指導主事)

先生ありがとうございました。

頓珍漢な事を言うかもしれませんが、乱暴な言い方をするかもしれませんが、私は疑問に思っておりまして、「主体的で対話的で深い学び」って、誰もが言うんですが、何がこの中で大事なのだということが分かりません。私は「深い学び」が大切だと思います。先生の事前資料でも共通していることがあると思ったのですが、指導助言を行われなければならないので、「深い学びとはどんな授業をすれば深い学びになるのだ」と、上越教育大学の先生であり、元文部調査官で国学院大学の先生がおられて、このことをぶつけてみました。「私は、主体的で対話的で深い学びのなかで、キーワードは深い学びだと思っています。」と答えられました。「主体的は意欲的な部分、対話的は対話的な部分」そこは出来ます。「深い学びとは奥が深い」と、先生がおっしゃるように、これからの教育に「人生のための学び」とありますが、考える君などのこれからの教育でないといふ深い学びにならないという話も一つです。上越教育大学の先生も「いろんな授業の典型例を出していかなんだろう」と言われていました。「主体的、対話的」は、授業の形や形式でできます。ただ、「深い学び」につなげていこうと思うと、なかなか奥が深いです。かつて、総合的な学習の時間が出来た時に、今でも私は解決していないのですが、「教科の横に置くのか、教科の下に置くのか、教科の上に置くのか」当時「探究型」という言葉でしたから、各教科を融合して究めるという、求めるのではなくて、究めるなんだと、当時教育課程研の時に、当時の府の総括指導主事がおられまして、私は質問したんですが、その回答が名回答で、今でも覚えています。「そうして疑問に思うことが大事だ」と言われました。今回の小学校の英語学習の総合的な学習時間が15時間ほど移行で使っているということですが、総合的な学習の時間というのは、まさに人生につなげる時間でありまして。

元に戻りますが、主体的、対話的の次の「深い学び」についてなかなか明確に答えら

れる方がいない。しかしながら、私が現場で授業を見たときに、この授業が、主体的ですね、対話的になって良いですね。深い学びにつなげていましたね。ということ进行分析しなければいけないのです。私は、今の段階ではこう思っています。先生がおっしゃたように、社会性スキルの問題で、このことを教科にどのように取り入れていくのかという問題や「自分自身のこととして考える」ということです。授業の中で、いろんな社会科の授業の中でやったけれども、その中で、低学年は低学年なりに、高学年は高学年なりに一つの事象の情報をつかむとか、ひろげる（共有すること）、意見を言う、つないで、そしてそこで、自分自身の問題で、子どもが発言をしているかどうか・・・ここではないかと思うのです。こちらの指導部で論議をしているが、明確な回答が出ていません。でも深い学びの授業とは何か？どういう形が深い学びの授業なのかということ、私たちもっていないと、学校で今後公開授業もあります。授業の上で指導助言しなくてはなりません。この部分にメスを入れていかないと、指導助言が出来ないと実感しています。「主体的で対話的で深い学び」は何回も何回もどこ行っても聞くのですが、でも「深い学びとは何か」「深い学びの授業とはどんな授業か」ということが明確にならないと、各学校に指導助言し、迫って行くことになりません。私たちもちろん勉強しなければなりません。

授業にいろんな典型例などを作っていかなければならないと思いながら、今日の先生の話の中で、反対は浅い学びとか、暗記型といわれましたけども、そういう単純にひっくり返した問題ではなくて、もっと自分自身の課題について、自分はどう生きるかとか、どう考えるかとか、社会性スキルの中で、テーマによって学びをつなぐとかありましたけれども、最後のアメリカの大学で事前に本を読んで行って、自分はどう考えるかということは、小学校の低学年なりに、中学年なりに、高学年なりに、中学校にあったその教材で、中学生なりに問いかける先生方の力量そういう授業が展開出来れば、私は、「深い学び」に入っていけるのではないかと思います。主体的、対話的とありますけれども、私は、キーワードは「深い学び」だと思います。「深い学びの授業は何か」ということを本当に明確にしないと私たちは、学校現場の中へは足を入れたいと思っています。これが、現状での一番の課題と思っています。

（大迫参与）

そうですね。もう少し表の所で詳しく言うと、主体的、対話的というのは方法です。学習指導要領は今まで内容を書いていたもので、方法については、それがはじめて書かれたとい様に言われています。その方法は、何のための方法かということ、いま森垣総括主事が言われたように、到達するためには、その方法が必要だということ。従来型の受動的で競争的な学びであると、深い学びは到底できないであろうということ。深い学びに到達していくため方法として主体的、対話的というのが書かれている。深い学びとは、どんな学びかということ、それに対してストレートな答えになってないと言えるかもしれ

ませんが、例えば、たった一つの正しい答えが与えられる授業という様に書いてあります。その横に構成主義的な授業と書いてあります。構成主義っていうのは、左のたった一つの正しい答えっていうデータを使って説明すると、答えは与えられるものではなく、自分が構成するものだというのが構成主義これは発想のものすごい大きな転換です。この子どもたち一人一人の壁というか、バリアはいろいろな背景がありますので、子どもたちから出てくる答えは個別で良いと思う。子どもたちが、自ら答えを構成していく学びが深い学びという様に言えるのかも知れないのです。与えられるのではなく、自ら構成していくという学びが深い学び。それを促していくこと。その深い学びが持つ力というのは、その下を書いてあるような、これから生きていくさまざまな場面に対して活用出来て、未知の問題の解決につながるような力につながっていくというのが、人から与えられた答えというのには、そういった力が無いだろう。自ら作り上げていった学びには、そういった力があるだろう。というのが深い学びをこの事から説明できることなんではないかと思いました。

もう一つ、深い学びとは何かという直接的な答えじゃないけど、深い学びが出来るようになると、その学ぶということが、生涯にわたって続けることが出来る。生涯にわたって学び続けるための学びが深い学び。生涯にわたって学び続けるためには、そのためのスキル、方法や態度、姿勢を持っていないと生涯にわたって学び続けることができない。そのためのスキル、態度を小中の時に獲得させてあげることにつながるのが、深い学びという様に、私は説明しています。

(坪倉次長)

ありがとうございます。

他にはありませんか。

(岡田委員長)

現在学校訪問を実施しておりまして、市場小学校の音楽の授業は、良い授業をされていたんだろうという想像は、出来るのですが、今日、学校訪問してきた学校は、なかなか授業自体が成り立たないクラスもあり、どうやって25人の学級を運営していくかの方に重点があるようです。先生がおっしゃるような理想を目指して、新学習指導要領に従って深い学びを行っていくことが大事だということは分かっているのですが、そこに至るまでに、いろんな子ども、いろんな家庭の事情の子どももいます。支援がいる子どもがいて、ざわついているクラスもありますし、先生によって指導力の格差があるので、一律にこういうことで進めて行きましょうという与謝野町としての教育としては、確立するのは当然なんですけど、そこまでいけない学校をどうしていくかということを考えていかないと、クラス自体が成り立っていないクラスをどのように立て直していくかが先決ではないかという様に思います。

いつも学校訪問するたびに切実に思うので、先生がおっしゃることは当然社会に出て、自分の足でしっかり歩ける子どもを育てていくのが、最終目的ではあるのですが、外国人の保護者の場合なのですが、先生が保護者とのコミュニケーションが取れない場合がありますし、支援が必要とすることばかりが目立ってしまって、それをどのように与謝野町の教育として行っていくかということが、なかなか私としては難しいと思いながら先生のお話を聞いていました。

私学なら受験して、ある程度家庭環境も似たような環境ですし、学力的にも一定の資質を持った子どもさんが通うと思うので、このような教育を進めるのとは考えるところが違ってくるのではないのでしょうか。

(大迫参与)

繰り返し申し上げているところは、国際バカロレアもそうだし、新学習指導要領の基本的な方向性もそうなのかもしれないですが、現場の中で、可能な形で、なにかその学校が抱えている課題を今までとは違うアプローチで向き合ったら、少しだけでもその問題が小さくなるかも知れない。同じようなやり方だといつまでも問題は解決できないかもしれない。たとえば、この前、市場小でも支援学級のクラスを見せていただきました。

慣れておられる先生がいらっしゃると思ったのですが、それはそれで、支援学級のクラスで学んでらっしゃるお子さんに、構成主義的な考え方、知識は与えられるものでなく、その子がその子なりに構成するものだということ、もはやそういった形でしか、支援学級の教育っていうものを構成されてないのかもしれないと思うのです。ただ明確に教育議論されていくことを学校全体でしっかり共有するとか、そこに、構成主義という言葉を使うかどうか別にしても、なにかそれぞれの抱えてらっしゃる課題の中に、使える部分が無いのかという見方、現場の先生とこの5年間よく出会う発言として、言っていることは確かに一つの理想の形を言っていますから、それに対して、それは理想であり、現実とは違います。という感じのものが、正直今まで何回も教育ばかりの現場だと思うのです。現場でやってきた分野なので、私学ということいえば、少し異なるのかもしれませんが、現場の感覚としては、あれは理想なことだと言われても、役に立たないというか、それはそれ、みたいな感じになるのです。ずっとやってきて、そういったことをやってきたからこそ使えるものは何か無いかという視点だけでも有るか無いかは、現実にある教室の中で落ち着きがない子どもに対してのアプローチとして、もしかしてヒントになるかも知れないので、その中で、実践いただくことも大事なのかも知れない。先ほど「外へ」と申し上げたのはそういうことで、どうしてもやっている煮詰まってきたてしまいます。同じ考え方、同じ方向しか、同じようなやりとりも同じアプローチ方法しか出来なくなってしまいます。だけど、なにかやったことが無いようなものを外から得ていくというのは、場合によっては機能するというのも、現場の感覚としてあるので、その点は無視するのはいけないことかと思えます。大きな全体像としての理想とし

で今だけを考えて、もっと先に課題があるという様になってしまうので、そこは少し切り分けた方が良いでしょう。形として何か大きな理想の整う大チャンスのような気がします。全体がそれを共有して歩んでいくというのは、そうでない状態とは違うものが、何か生み出されているんだろうと思います。もう一つ実際に解決しなければならない問題に関しては、新しいアプローチ方法、領域で考えて両方あるというようなのが、理想というか、こちらは良いけど、こっちは、もう無理だというのは、ダメだと思われ、両方がある意味独自の進行していくみたいなのが良い様に思います。

(坪倉次長) 他には

(樋口委員)

委員長がおっしゃられたことに関連して気になっていることなのですが、これから、対話的ということに対する評価の方法がどんどん変わってくると思います。それも必要なことだと思うんですが、現在、良く分かっている子、分からなくて、なかなか授業に入れない子が実在します。虫の事にはすごい興味がある。この虫の名前って英語でなんて言うのかな? 「それ英語だよ」というようなところから引っ張っていくというアプローチではないかと、何となくのイメージなんですけども。それぞれ興味のあるところを先生が評価していく、評価していくことによって、その子はその方面に伸びていくことが、先生が認めることによってというイメージとしては分かるのですが、それを評価するための教師の力というのは、すごい力があるのではないかなというのが個人的な意見です。

今までの評価体制というのを根本から変えていかなければ、私が理解したバカロレアという教育方法は、町内の先生は優秀なんですけど、それが転換できるかどうか? それも短期で出来るのかどうか? 大迫先生が先ほどおっしゃった、少しだけ変えていこう、それに働き方改革も含める。大迫先生のお話を伺っていて思うんですが、それを許容する、変えていくだけの先生方の意識なり、先生方の働き方を変えていくとなると、子どもたちの生き方を変えていく先生のバックアップというか、先生の力量がすごく問われる。今度先生方をフォローするための行政であるとか、私たち教育委員のバックアップというのは、たった少しのことを変えるだけなんだけれども、すごい労力があるんだろうと思います。私たちに、その気概が持てるかどうかというと、まだ不勉強なところもあるのですが、私は、ここ数年この役目を承っているが、それが私に担えるのかと、話を聞けば聞くほど不安になってくるというか、気概が無ければ改革ということはできないと思うのです。

私は、改革という言葉在世間は簡単に使い過ぎだということを懸念しておりまして、改革というのは、少しの改革でも血のにじむような努力をしたうえでしか成功しないものだと思われ、自分自身の自戒も含めて思っているところです。

問題提起にもなっていないのですが、私が普段思っていることをお話いたしました。

(大迫参与)

おっしゃったとおりで、改革というよりは、違う日本語の方が良いのかもしれませんが。私が申し上げてるポイントというのは、樋口委員が言われたのは、まさにそのことも含めてなんですが、関係する人、もちろん先生方がいちばん大きな核となるのですが、関係される方全体の体力の中で出来ることということで、先生方だけのことでなくて、そのすべてに関わる人全体の体力を考えて、そこで無理のない範囲となる。たとえば、変化がちょっとだけ起こるにしても、おっしゃたようにバックアップが必要で、無理のない範囲で言われる教育委員の役割ということでないかと絶対にもたない。

(樋口委員)

一つの学校、小規模校といえども、各学年に担任の先生がいらっしゃって、それに臨時の先生もいらっしゃって、またPTAとか保護者とか地域の方々があって、小学校、中学校が成り立っていく。意思の統一というのは、第一に必要なのです。思いがある中で、出来る、出来ないということをおっしゃったように、それをまとめていく力も必要ですし、そのあたりを意識としてもっていくというのは、それもまた大変なエネルギーがあるので、よほど強力なトップダウンであるか、それをアピールするというような形があると思いますが、そういった発言を変えていくという力は、いろんな方向でいるだろうといことは、大切にしているところです。

(佐々木委員)

感想しか言うことができないのですが、「深い学び」とは何なのかということは、生涯にわたって学び続けることができる、正にそれだなと思います。「それに向かってどのように進めていくのか」、「私たちが何をしたらいいのか」というところを考えるとこころです。先生方も実際それを生かしてやってくれと言われたところで、何をしたらいいのかというの、実際のところだと思います。

(森垣指導主事)

先ほど深い学びについて言いましたが、小学校の中学年で「私たちの地域与謝野町」を勉強します。数年前に副読本を私たちが作りまして、それを頼りにやっているのですが、岩滝小学校が府の社会科の教育の研究指定校になりまして、私も社会科の関係でよく質問をされるのです。先ほどの「深い学び」なのです。「先生どういう風に新しい社会科の中で、深い学びを入れたらいいですか」と質問がありまして、教務主任会で講演したのですが、3年生が地理学習をしますが、たとえば与謝野町には滝川もあり、野田川もあって、「ここで合流しているよ」ということをそれぞれグループで研究をする。

例えばですが、石川小では与謝野町には「こうのとり」が来ているという話、サケも上がってくるという話、日本の中で、サケの放流をしないで、自然に上がってくる最南端の地域なのです。サケが上がってくるということは、それだけ自然が豊かで水がきれいだと、それぞれ調査したことをそれぞれのグループで発表させると、そこで発表したことを教室で提示して、そこから広げる、情報を共有したらどうだというもので、だから主体的に学ぶ、広げるというのは、分かることを交流する。対話的、ここだったらどんな授業でも終わってしまっ、深い学びにつながらない。仮説なのですが、そこから一歩踏み出す授業の展開、ということをやっ、ていかななくてはならない。自分のこととして考える。そういう様な発問の仕方をやらなければいけない。自分でも固まっています、指導部でも話をして、いるんですが、たとえば与謝野町にはこんな素晴らしい自然がある、サケも来るとい、うようなことがあって、自分のこととして考えるのであれば、与謝野町の自然は、守っ、ていかなければならない。そういう子どもたちを育てていこう。

それから産業人口については、高齢化で非常に少ないです。そこから子どもたちの人口が少ない中で、与謝野町があるのだと、ここからどうして、いこうかと、自分のこととして考えさせる。深い学びというのは、パターンとして一つ言いましたが、調査研究で広げて、そしてそのことを自分自身の課題として考えさせる。そういう積み重ねが小学校の中学年や高学年になっていって、中学校になるとレベルがまた違いますから、日本の政治を少しのぞいたりします、ので、そこから自分の見方とか生き方とか、先生がおっしゃておられた、それが人生のための学びというのですか、見方につながっていくのではないかと、少なくとも学校現場には「深い学び」とは、どう、いう授業かということの、骨子を持っていて、それを例示してパターン化しないと、なかなか先生方は、主体的で対話的は出来ると思うんですが、深い学びにメスを入れる部分の、こと、のあり方、それには、私たちが「深い学び」とはなんだと、「深い学び」の授業とは、どんな授業なんだということ、を概念で持っていないと、なかなか厳しいということ、を言っているのです。私が思っているのは、たとえばそういう話を、岩滝小学校の研究主任の先生方に、したのですが、自分のこととして考え、与謝野町の将来のこと、未来のことを考えていく子どもたちを作っていくような提示をその授業の中、ではどうかという話を今漠然と思っ、ているところです。

(大迫参与)

例えば、今の地域の学習では、それはそれで一つの形になっていますよね。だったら深い学びの視点から言うと、それはトピック学習と、いって、一つの話、題について形をとって、いて、その学びを次の段階にするためには、自分たちの身近につけるというの、があります、一つは、その学びをした時のリサーチ方法というものは、どう、いう方法であつたか？ということ、を次に活用できる形で学んでおき、次の学年でのテーマの時に、それを使いながらさらにもう一歩学年での展開をしていくと、いった方法について、学びを

押さえておくと、それはトピックを超えた、ある種のつながりが出てきます。トピック学習というのは、どうしてもある種の知識学習になってしまって、もう一つ、次へのつながりは、たとえば人間と自然の関係という先のテーマでいえば、今どこで生きているか、時代とか場所とかがあったと思いますが、関係性という概念の中で、そのテーマをつなげる。その関係とは何か、さまざまなものの関係があるが、今は、人間と自然の関係について学ぶという概念で、それを概念化するということが深い学びへのやり方としてはあるような気がします。一番わかり易いのは、今申し上げたトピック学習かどうか。トピック学習は、深い学びの前段階であって、トピック学習がいかに高いレベルで完成していても深い学習にはならない。

(坪倉教育次長)

それでは、お揃いですので、休憩を閉じて、会議を再開させていただきたいと思います。また、ご質問をお願いしたいと思います。

(酒井教育委員)

先さきほどお話がありましたが、「主体的、対話的で深い学び」については、私はわりとイメージが湧いているほうでして、教育の方法自体というよりは、こういう子どもを育てたいというところに関しては、なんとなくイメージが湧いているのです。個人的な話をさせてもらおうと、例えば家庭教師みたいに少人数で教えている場合は、そういうことを意識して教えると思うのです。自分で話す力であったり、自分で考える力であったりを意識すると思うのですが、これが学校教育で1対20ぐらいになったときに、実際、どういう方法で教えるのかという部分についてはイメージが湧かない。

恐らく、このあたりが学校の先生もこれから悩まれる部分なのかなという様に思いました。先ほど大迫先生のお話にもありましたけれども、例えばグループワーク、現在学校訪問で回っていると結構行われているのですが、このグループワークでは、そういった力はつかないだろうなというような反応で、ただ机をくっつけて話し合ったりする様な、中身としては声も小さく、聞いているほうも聞いているのかどうかわからないようなグループワークをされていることが多いので、そういった部分で、具体的にどういった方法でこの新しい新学習指導要領の教育を行っていくのかという部分が、おそらく現場の先生方の悩みなのかなという様に思いますので、これは私たちのこの会議というよりは、現場の先生にそういったご発言をいただけるとありがたいというのが一点であります。

それから、二点目なのですが、先ほど委員長のお話にもあったのですが、私が今年でこの教育委員の任期が4年目で、4年間ずっと思っていることとして、教育委員会でもよく話には挙がるのですが、家庭教育の部分です。家庭教育というのは、家庭に対する教育ではなくて、家庭で行われる教育です。先ほどの先生のお話にもあった、働き方改革に関連

して、おそらく学校の先生の負担を減らすには、この家庭の部分、学校の先生が家庭に関わられている部分を何とか補助する形がないと、特に学校の先生の負担がなかなか減ってこないのではないかというのが、現場の先生方の声を聞いている私の思いです。そういったときに、行政の立場としてその家庭教育というか、家庭への支援といった格好で、どのような方法があるかというのを教えていただきたいというのが二点目です。

それから三点目ですが、これも4年間ずっと思っていることなのですが、与謝野町の教育のことを考えたときに、与謝野町の教育はこれをしていきますというものが、教育委員が5人いて、5人がみんな揃って与謝野町はこれをしていきます。と言うものが、今あるようでないと思っています。前回か前々回か、先生が少しお話しされたと思うのですが、例えば何かの特区の指定を受けているとかいうお話をされたと思うのですが、今であれば、先ほどの英語教育であったり、或いは情報教育であったり、いろいろなものがあるとは思いますが、与謝野町で言うと、例えば今、各学校を回っていて「力を入れているな」という様に私が感じるのは、ここは与謝蕪村の土地ですので、俳句教育に力を入れているとか、或いはどこも力を入れていらっしゃるなど感じるのは、読書活動に力を入れているとか、そういったものを受け継ぎながら、新しい英語も含めるのであれば、例えば言語教育というものに対して何かしらの、そういったものを行うとか、今の時代の情報教育、何かはわからないですが、言い方として少し軽い言い方ですけども、売りになるようなものをこれから導入できるような可能性はないのかなということも感じていまして、そのあたりについてもご助言をいただけるとありがたいです。

(大迫参与)

例えば机をくっつけてグループ活動をする。だけど内容は昔と同じようなものという形が、ゴールをとにかく先に、先生の中で設定がされていないと、そういうことになってしまうと思うのです。ゴールというのは、この時間なり单元の中で、子どもたちが何を獲得していくかというゴール。その中でこのアクティビティをどう活用するかという逆向きの設計というものがないと。そここのところのゴールというのは、先ほど先生がおっしゃった与謝野町としてのゴールというのではなくて、それぞれの单元の中でのゴールというのを。この前この先生が言っておられたのは、とにかく突き進んでいって、子どもたちはゴールなんか知らないけれども、とりあえず先生が教えてくださることにずっとついていく。今回やろうとしていることをうまくさせるなら、最初にそういったゴールが必要だということがあると思う。

あと、グループ活動的なものをうまくやらせてあげるようにするためには、この国の文化として良い時もあるのだけれど、グループワークの時は、できるだけそれを越えたほうが良いというのは、やっぱり人と異なる発言をしてもいいんだという、そういう教室文化なり、学校文化なり、或いは間違ってもいいんだみたいな、そういうことで自由に、子どもたちが恐れずに発言できて、その発言が常にクラスメイトからリスペクトされる。それ

が場合によっては、ちょっと言葉をうまく発することができないような子が、仮に発したくないようであっても、それに対してリスペクトをするみたいな、そういう基本的な教室文化を形成していくとか、やりながら形成していくものなのかもしれないが、それを一つのゴールとしないと、やったことが外に出ていない状態で終わってしまうという、何のためのアクティビティかわからなくなってしまうので、思い切って出させてあげる。出したら嫌な目に遭う、二度と言うことはやめたという子どもが出ないようにすることはすごく重要で、言ってよかったなという、恥ずかしかったけど言ってよかったなという体験をどんな子どもにさせてあげていくということが、すごく重要だと思います。

働き方改革との関連の中で、僕は学校の役割は家庭の中にシフトチェンジされるとは思ってないです。やっぱり家庭は家庭で、学校は学校で、具体的な役目というのは違って、相互補完的にあると思うので、学校がやっていたことを家庭が担うというのは、この状態はかなり不安定になると思うので、学校の中で体制を、先生方の仕事を、これは中学校の部活動の実態を知らないのだけれども、週5日の活動を3日にするのか、2日にするのかとか、最近よく、クラブの顧問に関しては、外から人を呼ぶということが動いてはいるのだけど、生徒の忙しさは変わらないということで、それでは意味がないんじゃないかという声が出ているということも耳にしますが、その中で、従来、絶対にこうしなくてはいけないというものの囚われから一回解き放たれて、ここは思い切って、「いいじゃない、一回戦で負けても」という。だけど、うちの野球部はこういうことを目標にしてやる価値があるからクラブ活動をしようとか、何かそういう囚われから解放されることによって、先生方の業務に関しての工夫というものを促していけないかという、この役目は変えてはいけないと思います。

三つ目の点は、話は戻りますが、僕はどうしてもインターナショナルスクール系の音楽の時間を見るが多かったので、あまりにも一斉に子どもがわっとやっているというのは、本当に久しぶりに見たのですごいなと思っていて、あそこで子どもたちが、先生のご指導の中で何か得ているものを、音楽の時間だけで終わらせずにつなげていく。何かあそこでだけで完結しちゃって、うちの音楽の教育は素晴らしいなというのではなくて、そこで子どもたちが育てた面を他のどこかで、例えばインターナショナルスクールでは絶対に育たないことを同じ音楽で教えてもらっているから、それを他の教室でも、そういうものだと先生方が認識してうまく活かしたら強いだろうなというつながり。

或いは、それで言うほど時間を使わなくてもいいのかもしれないが、つなげていくということ、せっかくここで実現しているものを活かすということ、他とつなげながら活かすということ、例えば与謝蕪村の俳句というものがあるとしたら、言語教育全体がそういうことにつながっていくとか。読書では、4技能と申し上げたけど、リーディングがその中で一番基礎になるので、そういう意味では最終的に英語がすごく求められるんです。だから、そういうものをつなげていくとか。英語の時間は、それは予算の問題とかがあるのかもしれないが、全員が読めるような絵本とかがいっぱいありますから、必ず大きな声

で一斉にリーディングしても構わないし、そういうリーディングを中心に、国語と英語と、場合によっては芸術につなげていくとか。そういうことで特徴を出して行って、伝統行事、芸術奨励みたいなものをせっかくですから一つのプログラムとしていくとかいう中で何か特徴的なものを出すとか。

ただ、ものすごく面白いなというものをすでに持っているような気がしているのです。僕はまだそれだけの情報量を持っていないので、この地区を管理している皆様方の中で、そのつなぐということについて、「こことこことこ」をつないだら一つのプログラムになるんじゃないか、どの子でも参加できるプログラムとして作ってあげるみたいなことで、そのへんを今の委員の話聞きながら思いました。

(酒井教育委員)

いま教えていただいた、各教科をつなげていく何か。さきほどの何かそういったことを売りにという話もなんです、以前から他の委員さんからもそういうお話が出ることはあって、その中でなかなか、これを与謝野町でやっつけようというところに今まで来なかったところがあるので、私はできれば、今日は何かそれを、こういう方向がいいのではないかということを出すぐらいの勢いで、今日は先生にお伺いしたいなと思って来たということです。

(大迫参与)

プロジェクトでもプログラムでも、名称はなんでも良いのですが、私は町として依頼を受けているので、町全体で一つをモットーにしようかと思うのですが、学校の事情を伺えば伺うほど異なるような感じがするので、少しそのことは難しいのかなということですね。

(酒井教育委員)

これから学校の統廃合の問題もありますので、おそらくみなさんがイメージとして持たれているのは、学校というよりは、町としてのという意味ではないかと。

(樋口教育委員)

与謝野町としての教育の方向というか、職務を承って、さきほどの言葉とは矛盾するところもあるかもしれませんが、やはり改革というより改善。私たちが知恵を出しあって、教育委員や行政の方々と一緒に知恵を出しあって、より良くするための改善というのを毎回教育委員会の中で議論するのは、そういったところが基本にあって、なかなか難しいのです。

少し臆病なところもありまして、もちろん外国語も大事ですが、まずは日本語がきちんとできていなくては、「本も読まなくては」、「語彙力も上げなくては」というところの危惧が僕にはありまして、そこらをするために何が提案できるかということ、申し訳ないのです

が、まだ何もわからないところなので、あまり声高々に言うべきではなかったかなと思うので、そこらへんが何か推していけるようなところが、提案していくところなのかなというのは、個人的にお話しさせていただいたことがあります。

(岡田教育委員長)

市場小学校の音楽は素晴らしいと評価してくださったから、音楽を通じて、それが発展して行って、クラスの勉強のほうにもつなげられるようにと思います。英語の音楽の歌を一曲歌って、発音からなにかから、いろんな意味で、音楽だけではなく、2教科の勉強にもなってくると思います。学校の格差は、規模の大きさも、統廃合してくると、ゆくゆくはだいたい同じ規模の学校に将来的にはなってくると思うが、今の時点では、ちょっと小規模校が多くて、クラス替えができる学校は本当に限られた学校です。

それと、少し話は、ずれるかもわかりませんが、総合教育会議なので、私たち委員会としても子どもたちの環境を、充実した環境で授業を受けさせることで、この暑さでエアコンの設置率がなかなか低い地域があるので、今日は町長も来てくださっているので、そこもお願いしたり、冒頭も申し上げたように、保護者との日本語のコミュニケーションがとりにくい保護者に対しての、行政として、そういう外国人の保護者に対しての日本語のサポートか何かをしていただけると、学校の先生方の負担も少ないかと思うので、今日は大迫先生だけでなく、総合教育会議なので、その辺を町長にお願いしたいかなということも思っていました。

(酒井教育委員)

そうですね。さきほどの話に付け加えさせていただくと、現状を知っていただくという意味でお話しさせていただきたいのは、私が今こういう、特化したものにこだわっているのは、毎年学校を回っていて、聞くことがあるのですが、例えば算数科の研究指定校になった、算数科の研究指定校になったので算数が伸びてきたのですが、国語が下がりました。みたいなことを聞くんですね。逆に、国語科の研究指定校になったので算数が下がりました。なんとなく、私が短い期間ですけれども、見ていて繰り返しているのではないかなという気がしていて、そうすると、やっぱり一本筋の通った何かがあると、そこだけはぶれないというものが必要なのではないかなというのを感じているのが、さきほどの「主体的、対話的な教育」です。

(塩見教育長)

最後の挨拶があるため、発言を控えようと思ったのですが、さっきおっしゃった、いろんな子どもがいるけれども、私はやっぱりこれからの教育を導入していかないとはいけません。いろんなことを今まで通りやってもいけないという様に思っております。結局は、最終的には自立する人間を育てていくことなのです。一人で、自分で生

きていく力を持った子どもをつくらなければ、何のための教育だと。

そうすると、やっぱり考える子にならないと。今までは受け入れるばかりだったので、それが僕は、いけないと思っているのです。ところが、教育を全部変えるというのは、まず無理です。だから、この授業ではこの時にこんな取り組みを入れてみようというのは大事なことです。その中で教師も学んでいくということが大事だろうとずっと思っています。

私の経験の中で一つだけ話します。私はある中学校に勤めておりまして、その中学校の英語の先生がものすごくしゃべるのが堪能で、私はいわゆる、聞けなかった、しゃべれなかった。私も結構な年数英語教育を習ったのですが、なかなか英語ができない。その先生は堪能だったのです。だから、これでいこうと思ったのです。ところがです。そうすると、そういうテストではないのです。やっぱり、試験のための学び、テストをするのです。

だから、私がいま脅威に思っているのは、大学入試が変わってくるということ。今の中一からだったか、これを脅威に思っておりまして、結局は中学生で言ったら高校入試が変わらないといけないのです。高校生は、大学入試が変わらないといけない。こういう学びをしなければいけないのかと。いま盛んに高校では記述型とかがありますが、やはりそれがないと、どうしても試験のための暗記型の勉強をするのです。先生もそこにいくのですね。

学期の評価を、こう変わって行って、高校の前も、いわゆるヒアリングもスピーキングもできるような、そういうことが評価できるような、いわゆる4観点ということになっていましたけど、4技能がどう評価されていく、そして考える子になった時にどういう、記述型の、今まで通りの穴埋め型の知識型の試験じゃなくて、ここになっていかないと、私はまた元通りになっていくかなという感じがしています。

先生がおっしゃったように、「楽しさが必要。でも、」という、この「でも、」の後をどうしていくか。小学校の英語は楽しいだけで、そして、どう評価していくか。これは私らもその研究を求めているわけです。これが中学校に行って、高校入試に関わってくるとまた変化していくのかと。そうなるかといけないので、このへんのことを、私たちはいわゆる京都府や文科省とも連携をとりながら考えていかないと、末端まで指導方法は変わりにくいと思うのですが、先生、そのあたりはどうでしょうか。

(大迫参与)

英語の授業に関しても、大学入試の4技能というのが始まりますから、実は丸投げしているのです。改革があまりにも巨大なので、例えば大学入試センターではなかなか手が回らないので、準備はずいぶん整っています。

僕は小学校英語でも4技能とあえて書いたのは、先を見越して、今から4技能でしっかり勉強をやらないといけないよということなのですが、いつも言われているところで、一回も起こらなかったのでは信じにくいかもしれないけれども、入試は変わっていく方向には、今までになく強くあります。

今、やはり何か新しいものを打ち出さないといけないということであるならば、今日お配りした中で、ピックアップするならば、最後のほうの授業全体のアイデアの、テーマによって学びを繋ぐとありますが、言葉として適当かはわかりませんが、学びを繋ぐというようなのが、さきほどおっしゃった、英語と音楽を繋ぐでもいいし、英語と国語を繋いでもいいし、実は単純な算数だったら英語でもできる。小学校一年生レベルの算数なら、小学校五年生の子だったら算数としてはもう理解していますので、結構、子どもたちは楽しんでやったりもする。

その中で、学びを繋ぐということで、先生方が今までにない一つの領域を作って、そこではできるだけ主体的に学んでいかせてあげるような、何かそういう基本的な姿勢をそこに意識しながらただ繋いでも、繋いで意識が宙吊りになっていたら受身で、おそらく新学習指導要領のラインには全く乗ってこないのも、もしやるとしたら、その中で学びを繋ぐことによって、例えば国語と英語を繋ぐことによって、或いはそこでリーディングというものを改善させることによって、考えるということにうまく繋がるかもしれないし、もしそういうことが大きな方針として明確に出せるんだったら、その後はもう少し、私はディテールを考えることができるかもしれないというふうに思います。

そういうことであるならば、今日の中では、とにかく繋がりを繋いでいくという、国語も4技能をやったら良いじゃないかとか。社会の4技能とか、何かそういうものでもいいですし、関係のある話を一つだけ。日本の教科学習のしかたは、どの教科も同じと言われているんです。算数の学び方、社会の学び方、理科の学び方、全部同じ学び方をしていると。実は算数の学び方というのは、算数の学び方というのがあるはずなのですよ。歴史を学ぶ時に算数の学び方ではなく、歴史の学び方というのがあるはず。そういうことで、各教科の学び方というのが個別に、教科学習とは別に子どもたちは学ばなくてはならないはずなのですが、そこは大事かもしれないですよ。それぞれの学び方というのがあるはず。同時に、それが一緒になると、もっと面白いかもしれないですよ。歴史と世界史の勉強のしかたと、数学の勉強のしかたが同じになるのは絶対におかしい。単純に考えて、全然違う領域のことを、今の授業は学習の目標とか、あれもこれも違うのに、我々は全て受験偏差値勉強でそれをやってきた。そこを作り直すのもヒントになるかもしれないですね。

(山添町長)

それでは、総合教育会議ということで、私のほうからも若干の発言をさせていただきたいと思います。先程から大迫先生からご説明をいただいた、与謝野町の教育の進め方というプレゼンテーションに即して、さまざまな議論をしていただいたということで、たいへん実りの多い時間になっているのではないかなというふうに感じられました。

まず、先生が冒頭におっしゃいましたように、今回のこの提案というのは、これまでの先生の視察を受けて、こういうことを考えていくのはどうだろうかとか、そういった提案

であったと思っておりますので、この提案を受けて、教育委員会のほうでも、どのように今後の学校教育に組み込んでいけるかということについて考えていただきたいというように思いました。

具体的に申し上げますと、何点かあったと思うのですが、例えば4ページ目の括弧の記述の中で、「この与謝野町が大切にしてきた文化、歴史、伝統に根差した教育というものを、言語化、理論化をしていくことが重要なのではないか」ということでしたり、その脈々と受け継がれてきた教育を数%でも変えていくということを考えるのであれば、新しく試みることとして、社会というキーワードをどう扱うかでありましたりとか、英語教育という分野でも、カリキュラムをいかに増強していくかでありましたり、具体的なご提言があったという様に思いますので、これらのご意見を含めて、教育委員会のほうでもまとめ上げていただきたいと思います。その上で、今後の教育の方向性について、2020年を迎えるまでに、整えていくことが重要なのではないかという様に思いました。

先生のお話を伺っていて、やっぱり私が特に強く感じましたのは、いかに理論的に教育をつくりあげていくかということの重要性だったのではないかなという様に思うのですね。そういう理論ベースでの教育の補整、構成ということ、今一度、私のほうでも学習し直さないといけないのではないかというように、自戒の念を込めて思いました。私といたしましても、そのような観点を含めて、今後の与謝野町の教育のあり方について考えさせていただきたいという様に思います。

そして、市場小学校の視察の中で、音楽のクラスをご見学いただいて、たいへん思うことがあったというふうにご指摘をいただいたんですけれども、確かにここ近年、本町の、特に小学生においては、音楽で学校が一つになるというケースが非常に多いなという様に思っています。これは各小学校に赴いた時に発表される合唱ですとか、地域に子どもたちが出向いて歌っておられる姿を見た時に、音楽で学校が一つになり、そして地域を結んでいくというような傾向が非常に強いのではないかなという様に感じているのですね。

過去を振り返ってみると、その素地が与謝野町にはあるような気がします。というのは、府立加悦谷高等学校においても、十数年前においては、成毛先生という非常に高名な音楽の先生がいらっしゃり、かつ合唱部を率いておられたということで、国際的なコンクールでも何度も優勝するような学校で、今でもその先生を囲む会が保護者さんを中心にしてあって、そういう流れも含めて、音楽ということに関しては非常に身近に感じておられる住民の方が多いのではないかというふうに思えるのです。

そうしたこれまでの過去を振り返ってみても、音楽との関係性というものが非常にあって、それがいま学校の現場で息づき始めているというのは素晴らしいことだなというふうに思っておりました。

もう一つ、特徴的な教育という面では、この地域はやはり短歌、俳句の振興については、特に旧加悦町の時代から取り組まれてきていて、現在も町としても俳句の振興を行ってきたということで、これも広い意味においては文学芸術というようなカテゴリーになって

いくのではないかなというふうに思いました。すなわち、音楽や文化、文学を含む芸術と
いうことを一つの柱に据えていくということが、もしかしたら出来るのではないかと
いうふうに、所感として、お話を聞きながら思ったところでありました。

この芸術という分野については、この間、たぶん日本の公教育においては、学校教育全
体の中での割り当てという時間から言うと縮小傾向にあったという様に思うのですが、そ
うした傾向じゃない時代に入りつつあり、おそらく、そういう芸術とかによっていろんな
繋がりというものを求めることができる。さらには芸術と、例えば言語教育であったり、
芸術と環境であったりとか、いろんなものとの媒体になりやすい領域なのかなという様に
思えるのです。

皆様方からこの間、与謝野町の教育の柱というものがあまり見当たらない、そして、そ
れを作り上げていく必要性というのは、やはり一貫してあるということも、教育委員会の
皆様方のほうからご提案があったということを考えました時に、私も皆様方のお話を聞き
ながら、良い方向性として見出すことができるのは、こういう様な感じなのかなというよ
うに、所感として申し上げておきたいと思います。

いずれにせよ、これらの方向性の議論については、教育委員会の皆様方のほうでもさら
に深めていただいて、できるならば、私としてもそのご意見を参考にさせていただきな
がら、私たちは皆様方の教育の振興に係って予算付けということになりますので、そういう
観点から支援できる環境まで、ぜひとも持ってきていただきたいというふうに思います。

いろんなアイデアがまだあるところだと思うので、ぜひとも大迫先生のお話をお聞かせ
いただきながら、これからの教育をより具体的に考えていくことができればいなという
ふうに思います。

いずれにせよ、本日、大迫先生からこのようにプレゼンテーションをいただいて、私た
ちそれぞれ、学ぶことがたいへん多くあったと思うので、このご提言をいかに今後の学校
教育に組み入れていくことができるかという観点から、教育委員会のほうでも議論を深め
てもらいたいということを最後に申し上げておきたいと思います。

(坪倉次長)

この総合教育会議につきましては、年度内にもう一度、総合教育会議を開催させてい
ただきたいという様に思っておりますが、次回、今年度のまとめという格好でさせていた
だけたらなというふうに思っております。

それでは、最後に教育長にご挨拶をいただきまして、終了させていただいてよろしいで
しょうか。では、教育長、お願いします。

(塩見教育長)

大迫先生、本当にお忙しいところ時間を割いていただきまして、与謝野町までお越し
いただき、このような資料まで教えていただきまして、たいへんありがとうございます。

町長の話にもありましたけれども、できる限り自分で考えて自分で対応できるような、そんな人間になっていかないと、教えられたことしかできない、それではいけないことだろうという様に常に思っております、この前の女子の世界バレーで、中田久美監督は何もしないのです。自分で選手が考えて、自分がどうやっていくかということを考える。私はやはり、考える時間というのが、授業中には要るのだろうと、こう思いながらずっと私の教職を反省しております、ぜひこの時間は、私は言うべきであろうと。

それから、与謝野町の特色ある活動というのは、これはまた今後考えていき、それも理論的にどうなのだというのを、理論的にまとめていかなければならないだろうという点は思っておりますが、進むべき方向は、私はその通りであろうという様に考えておりますので、ぜひまた、大迫先生、またもう一度この年度内にお世話になりますが、よろしくお願いたします。

こうして1年間、懇意にいただきまして、ありがとうございます。今日は活発なご意見が重なったと思いますので、今後ともご指摘をいただきまして、与謝野町の教育が進みますように、よろしく教えていただきますようお願い申し上げます、義を尽くしませんけれども、閉会のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

(坪倉教育次長)

ありがとうございました。それでは、これをもちまして平成29年度第2回の総合教育会議を終了させていただきます。皆様、たいへんありがとうございました。ご苦勞様でした。